

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：33939

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18673

研究課題名（和文）幼児のためのアプローチカリキュラム「言葉領域モデルプログラム」の開発と運用

研究課題名（英文）Development and Operation of a Language Domain Model Program, a Transitional Curriculum for Preschool Children

研究代表者

大島 光代（Mitsuyo, Ohsima）

名古屋学芸大学・ヒューマンケア学部・教授

研究者番号：00639164

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：発達性読み書き障害はLDの中核をなす障害であるが、その困難性が顕著になるのは、小学校において教科学習が開始されてからである。幼児教育施設に在籍中の幼児が「読み書き」困難による辛さを訴えることはないため、就学前にLD児であると診断を受けることは少ない。また、LD児の前駆症状の研究は多くない。本研究では就学後「読み書き」困難が現れることが予測される幼児が含まれることを前提とした幼児教育・幼児保育をすすめるため、聴覚障害幼児教育（聾学校幼稚部）で実践される言語力育成（「読み書き」の力を育む基礎となる言語力）スキルを活かした「言葉領域モデルプログラム」及びその実践の中で活用する教材開発に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年LDは「learning difficulties」（学習困難）「learning disabilities」（学習障害）ではなく「learning differences（学びの相違）」という新たな視点が生まれている。この視点を理解し就学前から遊びを通して音韻意識獲得を目指したり、年長児期には文字認知を促進する支援方法を活用したりするなど、保育者が正しく知識をもち対応できることが重要である。幼児教育施設に在籍する発達障害児の中で、就学前までは保育者から「気になる子ども」として注視されることが少ないLD児に対して、早期に発見し早期にケアすることは、社会的に意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Developmental dyslexia and dysgraphia, which are at the core of learning disabilities (LD), become pronounced once learning begins in elementary school. Children enrolled in preschool educational facilities do not report distress associated with reading and writing difficulties. Therefore, few children are diagnosed with LD before they enter elementary school. There are only few studies on prodromal symptoms in children with LD. This study developed a 'language domain model program' and its instructional materials by utilizing the language-skill development (language skills as the basis for developing reading and writing skills) technique practiced in preschool education for hearing-impaired children (the kindergarten department of schools for the hearing impaired). This is for the purpose of promoting preschool education and care that presupposes the existence of preschool children who are likely to experience reading and writing difficulties after entering school.

研究分野：特別支援教育

キーワード：幼小接続期 発達性読み書き障害 言葉領域 アプローチカリキュラム 音韻意識

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) LDは、1999年に文部科学省が1995年の定義をそのまま踏襲し、基本的には全般的な知的発達に遅れがないこと、視力も聴力も問題がないこと、その原因には中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されることなどを示した(文部科学省、1999)<sup>1)</sup>。発達性読み書き障害は、発達性ディスレクシア、ディスレクシアという用語が使われることもある。国際ディスレクシア協会(International Dyslexia Association:IDA)の理事会で2002年に定義が採択され、「ディスレクシアは神経学的な原因による特異的な学習障害である。その特徴は、正確かつ、あるいは流暢に単語を認識することの困難さ、つづりの稚拙さ、単語を音声に変換する(デコーディング)弱さにある。こうした困難さは、主に他の認知能力や学校での効果的指導から予測しえない言語の音韻的な側面に関する弱さが原因である。二次的に読解の問題を引き起こしたり、読みの経験が少なくなったりすることで、補遺や予備知識の発達を阻害することが起こりうる」とした。わが国では、LD 幼児を幼児教育施設で早期に発見し、適切な支援や指導を行うことはない。子どもの実態に違和感を持っていたとしても、保護者自ら療育につなげる例は少ない。発達性読み書き障害に関する知識は、当初子どもと長時間にわたって接する機会のある保育者・教育者にとって一般的ではなかった。そのため、LD 児を就学前に発見すること、もしくはLD 児がクラスには必ずいることを前提として幼児教育施設において、「読み書き」の力を育む遊びや活動を行うことを目指すため、LD 児の前駆症状や苦手とする課題への取り組み方についても研究・発信することにした。

(2) 長らく聴覚障害児教育に携ってきた著者は、小学校での通常教育の経験がある。過去に「勉強ができない子ども」と認識していた児童は、本当はLD 児だった可能性がある。知識を持てば意識が変わることから、聴覚障害児教育現場で、聴覚障害幼児や聴覚障害児童に対して「読み書き」の力を身につけるために行ってきた実践は、当然聴児にも活用できるという考えに至った。英国のHatcher,Hulme and Snowling(2004)<sup>2)</sup>のThe Reading with Phonology Program(R+Pプログラム)は、対象が4~5歳児となっている。プログラムの内容は、日本の聴覚障害児教育の内容と酷似していることから、音韻意識の獲得をベースとしながら「読み」の力を育み、向上させていく指導内容は、発達性読み書き障害幼児に応用できると考えた。

### 2. 研究の目的

- (1) 発達性読み書き障害幼児の前駆症状をとらえるため、幼児向けの標準化された言語力テストを実施し、その実態を明らかにする。
- (2) 幼小接続期にある発達性読み書き障害が疑われる幼児(年長児)の「読み書き」困難の実態を改善するための「言葉領域」のモデルプログラムを開発する。
- (3) 「言葉領域」のモデルプログラムにおいて活用する教材開発を行う。

### 3. 研究の方法

- (1) A県B市C園にて、年長児を対象に標準化された言語力テストを実施した。テストは、同様の条件にして実施するため、給食後から降園時までの自由遊びの時間に10人ずつ別室に集め、同じ保育者のよって一斉テストを実施した。説明は、テストのマニュアルどおりに全員に同じ言葉で行った。
- (2) (1)の言語力テストとクラス担任の観察により、就学後に「読み書き」の困難が予測される幼児(発達性読み書き障害と思われる年長児)を対象に、文字認知を促進し「読み書き」の力を育むための指導・支援を行い、「言葉領域」のモデルプログラム開発につなげる。
- (3) (2)の指導・支援を行う際に活用する教材を開発・試行し、プログラムの実践に活かせるようにする。

### 4. 研究成果

(1) 幼児向けの標準化された言語力テストは、「幼児・児童読書力テスト」金子書房(1977)を用いた。このテストは、T大学附属聴覚特別支援学校幼稚部で長年使用されてきた言語力テストである。聴覚障害幼児の就学に向けた言語力の育成を目的に、実態調査として継続的に実施し、一人ひとりの実態に即した指導・支援に活用されている。総合読書力のほかに6つの下位能力が診断できることが挙げられる。3歳児から小学校1年生までの児童を対象とし、読みの学習能力の有無を明らかにするとともに、文字や文・文章を読む読書力がどの程度の水準にあるかを測定したり、文字は読めても文の読みが劣るといった読書力の偏りを発見したりすることにより、一人ひとりの子どもやクラスの水準や、実情に合った読みの指導や言語教育を進めるために必要な手がかりを得ることを目的としている(金子書房、1977)<sup>注1)</sup>。

国立国語研究所の実施した全国水準調査(1967)では、就学前の年長児の「文字認知」の実態として就学前に約80%の年長児が60文字以上のかな文字を読むことが出来ることが示唆されている(国立国語研究所、1972)<sup>3)</sup>。島村ら(1994)<sup>4)</sup>の1988年の調査では、就学前の11月にはひらがなの音読力が「71文字の範囲で平均65.9字を読める(約93%の読み)」状況になると示された。

今回の調査では、各テストの素点から、換算点を求め、合計し、生活年齢と照らし合わせ読書力

偏差値を求めた。この読書力偏差値から読書力段階点をつける。読書力段階点は表1を用いて求めた。

表1 偏差値と読書力段階点の関係

段階点	1	2	3	4	5
偏差値	～34	35～44	45～54	55～64	65～
分配率	7%	24%	38%	24%	7%
評語	劣	下	中	上	優

今回の言語力調査の結果における読書力段階点の人数と割合を表2にまとめた。

表2 読書力段階点の人数と割合

性別 \ 段階点	1	2	3	4	5	計
男子(人)	12	27	38	33	12	122
女子(人)	3	21	34	33	19	110
人数の割合(%)	6.5	20.7	31	28.4	13.4	100

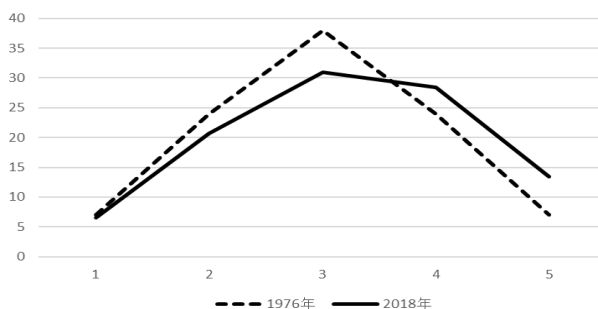


図1 言語力テストの各段階点への分配率と今回のテストの各段階点の割合

表1の読書力段階点の配分に対し、表2で示した各段階点の人数及び割合をみると、5段階の割合が13.4%と、本来7%と見込まれていた分配率を大幅に上まわっていることがわかる。段階点4についても同様に28.4%と、本来24%の割合を上まわる傾向が見受けられた。

段階点1(劣)と段階点2(下)の割合は27.2%であり、31%の配分を決めた42年前とあまり変わらない。言語力テストの配分と今回のテスト結果を図に表した(図1)。読書力段階点1(劣)の割合が、ほとんど変わらないことから、文字認知がすすまない、音韻意識の獲得が不十分という「発達性読み書き障害」が含まれている可能性があることが示唆された。

(2) (1)の言語力テストで、音韻分解課題や音韻抽出課題が困難、文字認知がすすまない(6月と11月に言語力を実施した結果)等の課題があり、なおかつクラス担任が保育活動の中で知的な遅れは感じられないが文字をあえて遠ざけるなど「読み」の困難があり、書字も苦手な様子が見受けられる年長児3名に、「読み書き」の力を育むための指導・支援を行った。その内容や指導方法を「言葉領域」モデルプログラムの構築につなげるため、個別に実施した3名への指導・支援内容の概要を以下に記す。

#### ア 導入期

言語発達診断検査(田研出版株式会社)を行い、語彙年齢を求める。

次に語彙の獲得や、清音や特殊音節の音韻が言えるか、ひらがなを読めるか、さらに音韻分解や音韻抽出の課題に取り組めるかについて観察し結果をまとめる。

絵カードを用いた音韻分解課題は、絵で表される名詞等の言葉を知らない場合は、音韻を分解することができない。正答する為には、言葉を正しく言えることと、音韻の分解が正しくできること、この2つの条件が整うことが必要である。事前に、184語(50音韻と濁音、半濁音、撥音、促音、拗音、拗長音を含む言葉)について、幼児の正答率を求めて、事後の結果と比較する。

ひらがなが読めない場合、絵カードの絵を見て「ことば」を言うことはできるが、選択肢を見て言葉を考えることができない。初めは、選択肢のひらがなの読みを教えながら、ひらがなを音韻を表す星にあてはめるよう支援した。また「いぬ」を「わんちゃん」としか言えない他、「にわとり」「よる」「らっぱ」など、生活の中であまり意識せずに過ごしてきた事物には全く答えられない様子が観察できた。以下の表は、3名中1名の絵カードの正答率である。清音・濁音・半濁音が含まれる言葉の正答率は50%以下、特殊音節に至っては40%以下のものがほとんどであった。また、ひらがな読み課題(30問)中10問正解で、の正答率は33%であった(事前調査)。

#### イ 指導期

聴覚障害児教育で行う音韻意識の獲得を目指した遊びをする。例えば「いぬ」であれば、2回拍手をして2音韻であることを認識するなど、聴覚や手拍子などの筋運動を活用して様々な感

覚を利用しながら音韻を体感する。促音の入る「きって」は3回拍手するが、「っ」の促音部分の音声は無音である。これらの特殊音節を理解できるよう、以下のような動作表現を取り入れた。

「視覚—音韻」の対連合学習をすすめる。

文字を提示しながら発音することによって、「視覚—音韻」の対連合化をはかる。特に拗音などの文字の提示は、聴覚障害児教育で「文字」カードを交互に示しながら正しい発音を誘導する指導方法を取り入れる。以下のカードは、著者が考案した発音誘導カードである。

文字を提示した時に、「視覚—音韻」の対連合学習がすすんだ場合、文字の「読み」が可能となる。読めるようになった平仮名を使って、トランプの「神経衰弱」のように、絵札と文字札を合わせる遊びをする。画用紙を切って札を作り、子どもと一緒に読める平仮名を確認しながら絵札と文字札を作成する。絵札と文字札が合った時は、必ず子どもに文字札を読ませる。また、とったカードを示すために、文字札を見て平仮名を書く取得表のカードを作成する。分かりやすいように、文字を書くカードにはマスを作り、以下のようにマス内は点線で4分割しておく。

「ひらがなパズル」は、ひらがなを2つのパーツに分けることで、ひらがなを大きなパーツで認識し、筆順ではなく、線の引き方や曲線などを言葉におきかえ唱えて覚える。視覚と聴覚を活用してひらがなを覚える教材「ひらがなパズル」は、同時処理が比較的得意な幼児には取り組みやすい教材であると考えられる。

ウ まとめ期

聴写を行う。聴写は、文を覚えて自分で書字した。自分で正しく書ける書字率は65%であった。簡単な文を読むことによって、内容を理解する。文の読みについては、指導期から簡単な文章の読みに取り組んできたこともあり、最終回には読みの文章課題5問に全て正解することができた。3名中1名のひらがな読み課題(30問)の事前・事後の結事前調査では、事前は30問中10問正解で正答率は33%であったが、事後は70%に伸びた。以下は、「言葉領域」プログラムの基本版である。

表3 「言葉領域」モデルプログラム

時期	言葉等	コミュニケーション	文字認知
導入(4月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語力の確認</li> <li>○音韻意識の獲得</li> <li>○語彙</li> <li>○言葉の理解</li> <li>○文字認知</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉による伝え合い(会話の様子)</li> <li>○会話での発信・受信</li> <li>○会話の内容</li> <li>○会話の理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字を読むことができるか。</li> <li>・文字を書くことができるか。</li> </ul>
展開	4月・5月 ・季節に関する言葉 ・行事に関する言葉 ・音韻意識を身につける遊び・活動 6月・7月 ・季節に関する言葉 ・行事に関する言葉 ・特殊音節が語頭にくる言葉を「ことばあつめ」し、その言葉を「音節(音韻)の動作表現」をして遊ぶ。	4月・5月 ・人の話を聞く姿勢 ・聞いた話に関する質問に答える 6月・7月 ・聞いた話に関する話し合いをする ・自分の考えや思いを伝える ・「たんけん・ぼうけん・ひらがな」カード等の教材を用い、テーマに沿った経験の言語化を行う。	4月・5月 ・朝の会で、今日の日付やお天気についての話を聞く。 6月・7月 ・今日の給食のメニューを確認する際に「みそしる」「ぎゅうにゅう」などの平仮名表記に触れる。 ・メニューの中の「ごはん」などの言葉を用い、「音節(音韻)の動作表現」をして確認する。
	9月・10月・11月 ・季節に関する言葉 ・行事に関する言葉 ・保育者が、上位概念と下位概念の整理を意識した話の仕方を意識する。 ・特殊音節に歌で親しむ視聴動画等の教材を用い、特殊音節に触れる。	9月・10月・11月 ・「たんけん・ぼうけん・ひらがな」カード等の教材を用い、お互いに言葉による伝え合いをする。 ・聞いた話に関する質問をする。	9月・10月・11月 ・特殊音節に歌で親しむ視聴動画等の教材を用い、特殊音節に触れることによって、「視覚—音韻」の対連合学習を行う。 ・朝の会で読めるようになった平仮名を使ったカードゲーム(絵札・文字札を合わせる)等をする。
	12月・1月・2月 ・特殊音節が語中にく	12月・1月・2月 ・聞いた話に対する	12月・1月・2月 ・絵本を自分で読ん

	る言葉を「ことばあつめ」し、その言葉を「音節（音韻）の動作表現」をして遊ぶ。	話し合いをグループで行い、質問をしたり質問に答えたりする。	だり、お手紙ごっこやお店屋さんごっこで文字を使って楽しむ。
まとめ(2月)	・「導入」で確認した事項を最終的に確認する。	・「導入」で確認した事項を最終的に確認する。	・「導入」で確認した事項を最終的に確認する。

(3) 指導・支援を行う際に活用する教材を開発・試行し、プログラムの実践に活かせるようにするため、以下のような教材製作を試みた。まず、標準化された言語力テストは、実施するためには時間や労力等の幼児への負担が大きい。そこで、言語力テストの簡易版を作成した。

障害児教育の現場では、聞こえに弱さをかかえる幼児の早期教育において、平仮名を提示し今音声で表出したことばはどのような音節で構成されているかを伝える。音声や手話、指文字は消失するが、文字は消えないため、年少児から文字を使って「視覚—音韻」の対連合学習を行っている。文字は、聴覚障害児教育には欠かせないツールである。また、聴覚障害児の語彙の拡充をはかるために、「言葉による伝え合い」を実践する場合、指導者が子どもに対し、見たものや経験したこと、感じたことを伝え合う際に、無理なく自然な形で子どもが今まで知らなかった言葉使いや言い回し、概念などを言葉のやり取りの中で獲得できるようにすることがある。米国から取り入れた聾児の言語指導法となる自然法 (Natural Language For Deaf Children) は、1989年に筑波大学附属聾学校で訳されまとめられている。著者であるグローとは「分析的指導法に基づくドリルより、適切な活動を用意して子どもの必要に即して言語使用を誘い、促すことが言語指導の基本である」と繰り返し述べた。自然法は、このことを指している (岡ら, 2016) <sup>5)</sup>。

「視覚—音韻」の対連合学習をさらにすすめるため、歌を歌いながら、無理なく特殊音節の拗音・拗長音の「読み」の促進をはかる視聴教材を開発した。

歌の歌詞や曲調は簡単に馴染みやすいものとし、画面の視覚情報として平仮名を提示しながら音韻とマッチングしていく方法で、「視覚—音韻」の対連合学習を実現することにより、平仮名の「読み」、特に特種音節 (拗音・拗長音) を促進することを目指した (大島ら, 2024) <sup>6)</sup>。以下は、1番の歌詞である。この歌詞を歌う音声と共に、画面には平仮名文字が提示される。画面に登場する動物や身近な物たちは、歌詞の他に画面上の吹き出しで「いけで およぎたい」などとつぶやく。この文の読みもできるようになれば、子どもにはさらに楽しくなるような工夫を施した。「清音+拗音」で表す兄弟の名前を歌詞に入れて、自分が5人兄弟の何番目かを伝え、自分の名前は何か問われたら、画面に表記された名前と音声で登場人物の名前を答える。

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「ぼくは あひるです。いけで およぐのが 大好きです。」 (自己紹介)</li> <li>2. 「あいうえお」 ※あひるのつぶやき「いけで およぎたい」が吹き出しに出る。</li> <li>3. 「あきゃ」「いきゃ」「うきゃ」「えきゃ」「おきゃ」 (2の「あいうえお」の1音韻+拗音「きゃ」)</li> <li>4. 「ぼくは 5人きょうだいの 2ばんめ です。ぼくの なまえは なんですか。」 (クイズ)</li> </ol>
--

※本報告書の一部(「1. 研究の背景」「4. 研究の成果 (1)」)は、愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻博士(教育学)学位論文「(発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした言語指導プログラム開発に関する研究)大島光代, 2020)を基に抜粋・加筆を行い作成した。

注記

1) 「幼児・児童読書力テスト」: 幼少年教育研究所編、金子書房、1977

〈 引用文献 〉

- 1) 文部科学省、学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議報告書、1999
- 2) Hatcher, Hulme and Snowling, Explicit phoneme training combined with phonic reading instruction helps young children at risk of reading failure, Journal of Child Psychology & Psychiatry, 45, 2004, 338-358
- 3) 国立国語研究所、幼児の読み書き能力、東京書籍、1972、426-431
- 4) 島村直己・三神広子、幼児のひらがなの習得—国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して、教育心理学研究、42、1994、70-76
- 5) ミルドレッド・A・グロート著、岡辰夫訳・斎藤佐和監修、自然法—聾児の言語指導法、ジヤース教育新社、2016
- 6) 大島光代・小岩恭典・岩田直人、重複障害児の「読み」の力を高めるための指導実践—聴覚障害・知的障害を併せ有する児童への取組—、資質・能力を育てる教職カリキュラム研究 (教育実践記録集)、5、2024、84-92

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大島光代 水野達哉	4. 巻 第7号
2. 論文標題 知的な遅れのある児童の特殊音節読み指導実践における考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 21世紀型教育研究	6. 最初と最後の頁 142・149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大島 光代	4. 巻 49
2. 論文標題 発達障害が疑われる幼児への「自然法」を用いたコミュニケーションアプローチによる言語獲得の促進 - 聴覚障害児教育のスキルの活用と応用 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 43～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20698/comm.49.1_43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大島光代	4. 巻 第48巻
2. 論文標題 発達障害が疑われる幼児への「自然法」を用いたコミュニケーションアプローチによる言語獲得の促進 聴覚障害児教育のスキルの活用と応用（条件付き掲載：修正中）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大島光代（名古屋学芸大学）	4. 巻 1
2. 論文標題 幼小接続期における年長児の読みの力と文字認知 - 「言葉」領域のアプローチモデルカリキュラム開発に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 資質・能力を育てる 教職カリキュラム研究（教育実践記録集）	6. 最初と最後の頁 33 - 38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島光代 (愛知教育大学大学院教育学研究科3年博士課程)	4. 巻 7
2. 論文標題 幼小接続期における音韻意識の獲得と幼児教育施設の言語環境について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島光代 (名古屋学芸大学)	4. 巻 47
2. 論文標題 発達障害が疑われる幼児への「自然法」を用いたコミュニケーションアプローチによる言語獲得の促進 聴覚障害児教育のスキルの活用と応用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 投稿中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大島光代・鶴田敦司・小濱真奈美・藤本裕人
2. 発表標題 幼児期からの聴覚学習 (5) - 幼児期・学齢期の「読み」につなげる指導方法について
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 幼小接続期における「発達性読み書き障害」前駆症状の研究
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島光代・鶴田敦司・深江健司・藤本裕人
2. 発表標題 幼児期からの聴覚学習(4) - 幼児期・学齢期の「読み」の力につなげる指導方法について -
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 「幼小接続期における『発達性読み書き障害』を疑う幼児への『読み』につながる教材 発達性読み書き障害の早期支援を目指す「言葉」領域のアプローチカリキュラム開発に向けた教材開発」
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島光代・酒井仁美
2. 発表標題 「発達性読み書き障害が疑われるA児への幼小接続における支援と就学後の困難及び『読み』の力に関する考察」
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 発達性読み書き障害の疑いのある幼児への就学前の支援
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会 WEB開催
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 幼児の保護者・保育者の非認知的能力の評価と言葉の力の関係性ー幼小接続期における言葉領域アプローチカリキュラムモデル開発についてー
3. 学会等名 日本家庭教育学会第35回大会 WEB開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 発達性読み書き障害の前駆症状への早期支援 幼児期からのインクルーシブ教育に求められる主として「国語科」につながる「読み」の力を育成する教育環境の変革ー
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 幼小接続期における「音韻意識」「文字認知」と言葉の力の関連性ー発達性読み書き障害の早期支援を目指す「言葉」領域のアプローチモデルカリキュラム開発に向けた教材開発ー
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島光代
2. 発表標題 幼小接続期における国語科の「読み」につなげる 言語活動教材の開発 聴覚障害児教育のスキルを活かした経験の言語化と遊びを通じた支援
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）・鎌田ルリ子（筑波大学附属聴覚特別支援学校）・鶴田敦司（帝京平成大学）・小濱真奈美（愛知県立瀬戸つばき特別支援学校）
2. 発表標題 自主シンポジウム「幼児期からの聴覚学習（２）－教育現場に活かせる聴覚障害児教育の『聞く』『話す』スキル－
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）
2. 発表標題 ポスター発表「幼小接続期における年長児の「文字認知」が言葉に及ぼす影響 発達性読み書き障害を早期に支援する『言葉』領域のアプローチカリキュラム開発」
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）酒井仁美（菱野幼稚園）
2. 発表標題 口頭発表「幼小接続期における幼児の言葉の力を育むための取組 聴覚障害児教育のスキルを活用した「読み」の力につなげる実践」
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）・鎌田ルリ子（筑波大学附属聴覚特別支援学校）・鶴田敦司（帝京平成大学）
2. 発表標題 教育現場に活かせる聴覚障害児教育の『聞く』『話す』スキル－幼稚園における聴覚学習－
3. 学会等名 日本LD学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）
2. 発表標題 家庭における保護者の意識が幼児の発達に及ぼす影響 - 言葉の力・非認知的能力を中心に -
3. 学会等名 日本家庭教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）
2. 発表標題 ことばに課題をかかえる幼児向け言語指導プログラムの提案（開発と活用）
3. 学会等名 日本教材学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学・愛知教育大学大学院）
2. 発表標題 言語指導プログラムを用いた発達性読み書き障害幼児の指導
3. 学会等名 教科開発学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島光代（名古屋学芸大学）
2. 発表標題 「森のこども園」における木のおもちゃづくり活動の実践 - 幼児の保育からの学生の学び -
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大島光代・吉葉研司・渡辺桜・藤井正子・鷹羽綾子・水谷誠孝・林麗子・想厨子伸子・西村美佳他8名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 227
3. 書名 子どもの育ちとケアを考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------